

森って不思議。
森ってすごい。

森で遊び、学んだ子どもたちがいます。
彼らのめざましい成長に目を丸くし、
もっと伸ばしたいと思った先生たちがいます。
森で育まれる子どもたちの力は、
個人のものだけではありませんでした。
つながり、巻き込み、
大人たちをも変える子どもたち。
いったい森は子どもたちに
何をもたらしてくれているのでしょうか？
え？まわりには森なんてない？
いえいえ、森への扉はいろいろあるんです。



子どもたちの「生きる力」を育む 森林環境教育の輪を広げるために
学校の森 子どもサミット

令和元年度 学校の森・子どもサミット 報告書

2019年11月2日(土)
会場：長野県伊那市立伊那西小学校
主催：学校の森・子どもサミット実行委員会
(公社)国土緑化推進機構、(特非)共存の森ネットワーク、
森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク、
(独)国立青少年教育振興機構、長野県、
長野県教育委員会、伊那市、伊那市教育委員会、
伊那市ミドリナ委員会、林野庁
特別協賛：(一財)セブン-イレブン記念財団

12:00	開場、受付開始
12:30	伊那西小学校の森散策
13:30	開会
13:40	第1部「子どもサミットのこれまで」 休憩
15:05	第2部トークセッション 「森で起きたこと・森と触れる效能」 休憩
16:25	第3部「森がぼくらの教室だ」
17:00	閉会

学校の森・子どもサミット実行委員会

この報告書の作成には長野県森林づくり県民税を活用しています。



令和元年 11月2日(土)、「令和元年度 学校の森・子どもサミット」が長野県伊那市立伊那西小学校にて開催されました。

伊那西小学校の森散策

「森はぼくらの教室だ」をテーマに、校舎に隣接した学校林で年間を通して授業やさまざまな活動を行う伊那西小学校。子どもサミットの開演に先駆け、12時30分～13時15分までの45分間にわたり、小学校でのふだんの林内活動が各学年ごとに行われました。来場者はその姿を自由に見学しながら、小学校の森を散策です。

1年生は「シャボン玉あそび」。木々に囲まれた森の教室で絵本「ムウのしゃぼんだま」の読み聞かせが行われ、その後、シャボン玉あそびがスタート。ふわふわ、風に揺れてあちこちに運ばれるシャボン玉を追いかけてはしゃぐ子どもたちの笑顔が印象的でした。

2年生は「落ち葉のドレスづくり」。新聞紙を洋服に見立て、拾った落ち葉をテープで貼り付けていきます。感性にまかせて自由にペタペタ、色をあわせてキッチリ…と個性さまざま。ラストは森の木で作られたステージでのファッションショーです。手をつないでぐるぐる回ったり、跳ねたり、踊ったり。その姿はまるで森の妖精のようでした。

3年生は「チョウの学習」。虫取り網とカゴを手に、校地や林間内のチョウを観察して回ります。これまでも継続的に行われてきた活動で、今年はアサギマダラ、オオムラサキなど14種類のチョウが観察できたといいます。「ここ、いそじゃない？」など、子どもたちの積極的な意見が飛び交っていました。

4年生は「あく抜き用灰作り」。どんぐりの粉でクッキーを作るという目標に向けて、今回はコナラを中心とした広葉樹を燃やし、あく抜き用の灰を作ります。なかなか火がつかず苦戦しましたが、最後は上手に燃え始めてホッと一息。焚き火でマシュマロを焼き、熱々をほおばりました。

5年生は「リタートラップの観察」。林間内に設置したリタートラップにある葉の種類や量を調査します。この地に生息している木々の状態だけでなく、どこから何が飛んできているのかもわかります。また、6年生は「森の観察・樹高調べ」。整備作業により新しくなった「きらめきの森」のプロットの観察の中で、林間内の木の高さを算数で学んだ拡大縮小を使って調べました。まずは森を深く、多角的に知ること。そこから見えてくるものが学習につながるのです。

教科の枠を超え、「森での学習」はアイデアや発想次第でさまざまな可能性を秘めています。テーマにあわせてのびのびと活動を楽しむ子どもたちの姿から「森の持つ力」を改めて感じた時間となりました。



第1部 「子どもサミットのこれまで」

サミットの第1部は、これまでの学校の森・子どもサミットの成果を各学校の事例などから紹介。学校と森が離れていたり、森との関わり方に迷いながらも、さまざまな状況で森とつながる取り組みをしてきた先生たちの声を聞きました。

なお、ご登壇者の所属は2019年現在のものです。発表内容の学校名が異なる場合は、過去の子どもサミット参加時点の学校についてお話しされています。



井戸 しのぶ 先生
東京都八王子市立山田小学校

東京都では最大の約0.7ヘクタールの学校林を持つ「多摩市立豊ヶ丘小学校」。井戸先生は森の活動を通じて「自分たちで気づき、活動する」子どもたちの姿を目の当たりにしました。「整備グループ」「調査グループ」「制作グループ」などさまざまなグループが発足しましたが、そのひとつ「看板グループ」は学校林の入口の看板が外れていることに”気づいた”子どもたちが発足したグループ。看板を作ろう！と、デザイン、見積もり、校長先生への交渉を行いましたがお金がありません。しかしそこで諦めることなく、森で見つけた丸太を薄切りにして自分たちで看板作りに励みました。つるや枝で文字を書き、どちらがいいか学年に問いかけるなど検討を重ね、自分たちらしい看板を“無料”で作ることに成功したのです。

活動に際し、学校が行ったのは子どもたちがやりたい活動を保証するための準備。人を繋ぐなど地域の財をあらかじめコーディネートしておくことが土台になりました。また、さまざまなグループが同時に活動を進める中で先生が大切にしたのは立ち止まって考える時間。他のグループの活動を共有し、視野を広げさせることで次へのヒントに繋がりました。先生はこう話します。

「森の活動によって森の環境問題が解決できたのかどうか。それは簡単には答えの出ないものであり、ジャッジすることはできません。しかし、子どもたちは間違いなく自分に自信を持ち力をつけたと言えます。また、そういう子どもたちから教員は力を得て、学校も変わっていったと実感しています」



大澤 昇治 先生
長野県大町市立大町南小学校

長野県北西部に位置する「大町北小学校」「大町南小学校」。この2校で大澤先生はそれぞれ特色を持った森の活動に携わりました。

大町北小学校には学校林がありません。しかし自然体験をしたいと希望した子どもたちが見つけたのが「山の子村」です。大町温泉郷を興した故・内山慎三さんが「子どもたちに自然体験の場を」と私有林20ヘクタールを整備し開村した場所ですが近年は利用者の減少から閉村していました。囲炉裏のある山小屋や図書館、池などが点在するこの村を気に入った子どもたちは「山の子村を復活させよう」をテーマに活動をスタート。体験を通して感じた山の子村の良さを多くの人々に伝えたいと「山の子村祭り」を企画し、5年生の時に実現しました。

「山の子村復活は里山再生の第一歩。真剣に楽しく続けることが内山さんの願いにつながることだと子どもたちは実感し、4年生に受け継ぎながら自分たちも続けていこうと宣言してくれました」

一方、南小学校では、校舎をぐるりと囲む松林の再生プロジェクトに取り組みました。伐採した木を椅子にしたり、木で作られたステージでコンサートも開催。また、皆で苗木を育ててバザーに出店し被災地への募金活動も行いました。敷地内の池も地域の方の助けで復活し、松林は子どもたちのお気に入り基地へと変わりました。「スマイルランド」と名付けられたその環境を気に入った彫刻家・国松希根太さんが自らの作品を設置したことから、同小は大町市が開催する芸術祭の会場にもなり、現在も国松氏によるワークショップが校内で開かれるなど幸せな繋がりが生まれています。



小川 恭平 先生
静岡県牧之原市立細江小学校

初任から4年間、子どもサミットに参加し、森での活動を通じて「教師として成長できた」と実感している小川先生。今回は初任者がどのように森と関わるかという独自の目線からの発表でした。ポイントは3つのキーワード。(1)とにかく頼る (2)られつを繋げる (3)いいことたくさん です。

愛知県岡崎市立 生平小学校は長年「愛鳥活動」に取り組み、生物の保護や自然の保全を目指す学校です。小川先生が赴任した頃には新東名高速道路の建設や里山整備が行われ、総合的学習のチャンスにあふれていました。

「しかし初心者にとってはピンチ。何をしていたかわかりませんでした」と小川先生。そんな先生が最初に行ったのが市役所に電話すること。整備団体、地元の方々にも協力を仰ぐなど周囲に「頼る」ことから始めました。

授業で意識したのが「られつを繋げる」です。例えば「蛾は生活に必要？」という問いかけに「気持ち悪い」と答える子どもたち。しかし「鳥の餌になる」「受粉で森に役立つ」「森林は酸素を出して人の呼吸に役立つ」→「だから蛾も必要だよ」と示唆することで視点は大きく広がります。ほかにも活動が単発で終わらぬよう繋げたり、思考と活動を繋げるサポートを行いました。

3つめの「いいことたくさん」は森との関わりを通じて得られたこと。学び、充実感、達成感、全員活躍の場であること。学校や地域が好きという思いを持てること。

「森と関わらなければならないと言われてもそうではありません。ただ多くの事例がある森は初心者にも非常に扱いやすい教材のひとつです」と小川先生。「まだ森に関わったことがない方がいましたらぜひ『TRY』してください！」と明るい言葉で締めくくりました。



鳥越 巖之 先生
岡山県西粟倉村幼稚園

現在は幼稚園の園長をつとめている鳥越先生ですが、もとは小学校の教諭をつとめており、西粟倉小学校時代に5年間子どもサミットにも参加しました。人口1400人の西粟倉村では「村の子どもを育てるためのふるさと元気学習」として幼稚園、小学校、中学校と貫く特色ある教育づくりを行っています。

「大切なのはどのような子どもを育てたいか先生がイメージをすること」だと鳥越先生。例えば低学年は「探検隊」。探検して見つけて感性を育てていきます。中学年は「記者」。様々なものを取材して記事に書き、それを伝えることで探求する力を育みます。そして高学年は「ふるさとプロデューサー」。自分たちにできるふるさとづくりを考え、実行していきます。

森で遊んで元気になった子どもたちは「自分たちが学校を元気にして周りの人にも元気を届けよう」と当たり前のように考え始めます。ここからは「森が広がる」学習。学校を元気にするキャラクターを考えたり、ふるさと元気グッズを製造して流通させたり、ふるさとで頑張っている人を表彰したりと活動は広がりました。

「子どもたちは地域の本物の教材を使い、体験を通して答えのない課題を本気で考え、本気で実行しています」と鳥越先生。かつての教え子で、現在は高校生になった少女に小学校時代の学びについてたずねたところ「いまでも西粟倉が大好きです。それは小学校のころから広く深く西粟倉のことを考えてきたから。私は将来、よそではなく地元で役に立ちたい」とはっきり答えてくれたそう。森での学びが子どもたちに「ふるさとについて本気で考える」大切な機会をもたらしています。



二木 栄次 先生
開催校：伊那西小学校校長

校舎に隣接した1.4ヘクタールの学校林を活用してさまざまな林間学習に取り組んでいる伊那西小学校。

「林間は最高の自然教室です。子どもたちは四季折々に変化する自然を体いっぱい感じて生活しています」と二木先生。全校集会、校長講話、全校音楽、みどりの少年団、児童会、週2回800mの林間マラソン。秋には木の枝や実を使った造形活動が行われ、植物や水車小屋をスケッチしたり、国語の短歌づくり、算数ではかさや重さ、枝の角度や葉っぱをつかった線対称の図形など、自然を使った様々な学習が行われています。

一方で、70年近く経った森を守り続けていくのは大変なこと。台風の被害で木が倒れたり、枝が折れたり、病気が進んでいるところもあります。そこで、アドバイザーや地域の方に協力を得てはじめたのが森の整備。森半分を4つのブロックに分けて「新しい森」「学びの森」「つどいの森」「遊びの森」をテーマにした森づくりを進めています。アカマツ、カラマツを中心にひとつのブロックの木を切ることになった際には、児童全員で木に触れ、木の命を受け継ぐ会を開きました。大きな木の幹をぎゅっと抱きしめていた子もいたといいます。

新しくなった森は「きらめきの森」と名付けられ、整備された自然観察路を毎月歩いて観察したり、リタートラップの研究をしたり、各学年のテーマに沿った新たな学びがここから始まっています。

「木が切られてかわいそうだったけど光が差してきれいでした」「切り株からはいい匂いがしました」「木を切った切り株は面白いと思いました」と子どもたちの声。子どもたちは五感で森に親しみ、「豊かな心」を育んでいます。



第2部 トークセッション 「森で起きたこと・森と触れる效能」

サミットの第2部はトークセッションです。第1部の発表者の皆さんに加え、コメンテーターに東京農業大学 地域環境科学部 森林総合科学科教授の上原 巖教授、ファシリテーターにフリーパーソナリティ・武田 徹さん、野外保育「山の遊び舎 はらべこ」卒園生で高校3年生の林 慈雨(じう)さん、同園で保育士として働く母・美紀さんを迎えた9名が登壇。武田さんの軽やかなトークを皮切りに会場は和やかな空気に包まれ、登壇者もリラックスした雰囲気の中で意見を交わしていました。

「五感と森」というテーマに対して、井戸しのぶ先生は「教室では活躍できない子が森に入ったら目覚めることがあります。森の中では諸感覚が研ぎ澄まされていく。生きる力やたくましさは教室の中だけではわからないですね」と発言。また、小川恭平先生は「最近は何かにつけてスマホやパソコンで調べられる時代。そこには肌触りも書いてあって『ざらざらしてるらしいよ』で終わってしまうんですけど、実際に触れば子どもによって感触は違うし、言葉の表し方も違う。語彙を増やしたり感覚を磨く意味でも五感と森は結びついているように感じます」と話してくれました。

会場から寄せられた「当たり前すぎて森を意識できません。どうやって意識化していけばいいのでしょうか」という質問に対して鳥越 巖之先生は、自身が勤める幼稚園での例を交えながら「私たち指導者がいろいろな感覚を意識して子どもたちに関わるのが大切。

子どもたちから出てくる言葉や発想を『すごいね』と一緒に喜んであげることが、自然の中で気づいたり、自由に話すことができるきっかけになります」と語りました。

また「森は規格化されていないからこそ子どもたちの冒険心を駆り立てるのです」と話すのはコメンテーターの上原巖教授。「『森はどうして効果があるのですか』と聞かれることも多いのですが、人工物と違うのは”無作為”なこと。規格品とは違って自然はアットランダムで気まぐれです。そうした縛られない環境が成長段階の子どもにとっては大切」と語り、学力への効果についても「世界に共通して、ノーベル賞をとった人は幼い時に自然体験を持っている人が圧倒的に多いです」と紹介。「自然の中で、課題発見と解決を無意識のうちにやっている。そんなところからも学力を高める要素は多々あるのでは」と見解を示しました。

トークセッションの最後には、野外保育園の卒園生であり、現役高校3年生の林慈雨さんが「(保育園の)3年間を森で過ごしましたが、森で遊んでいると自分がしたことで森が変わり、自分に返ってくるという関係性があります。そんな達成感や自分でもできるという感覚が心の下の方にある、『あれもしてみよう』『自分をもっと変えていこう』というエネルギーになり、今の自分を支えてくれています」とコメント。会場中が笑顔と拍手に包まれる中、トークセッションは幕を閉じました。

登壇者の皆さん

ファシリテーター：武田 徹さん
フリーパーソナリティ「つれづれ遊学舎」主宰。長野市出身

コメンテーター：上原 巖 教授
東京農業大学 地域環境科学部 森林総合科学科教授
日本森林保健学会 理事長

林 慈雨(じう)さん
野外保育「山の遊び舎はらべこ」*(伊那市)卒園生(現在高3)
*「山の遊び舎はらべこ」は信州やまほいく特化型認定園

林 美紀さん
慈雨さんの保護者。子どもの「はらべこ」通園を機に保育士となる。現在「はらべこ」勤務

井戸 しのぶ 先生

大澤 昇治 先生

小川 恭平 先生

鳥越 巖之 先生

二木 栄次 先生



森ってどんなところ?

楽しいものがたくさん落ちていて 木がたくさん立っていて 動物がいそうでおもしろくて きれいな落ち葉とか落ちているのが楽しい

わくわくしちゃって 木がいっぱいゆれているからおもしろい 木がたくさんあるから かくれんぼやおにごっこもできるし ふしぎなところ どうして木は生えてくるのかなーって思っちゃう どうして森はできたのかなーって思う ドキドキわくわくしちゃうかんじ

葉がいっぱいあるから おりょうりもできる どんぐりや松ぼっくりもたくさんあるからおりょうりができる

森には川がながれているから 水草があってほうきであつめて フカフカのクッションもつくれる 森のなかはさむくて 風がふくと気持ちいいからたのしい

鳥の羽とか落ちてるとワクワクしちゃう でもばいきんをもっているからひろわない

でも森ってふしぎだなー どうしてできたんだろうって思う 雪が降ったら 雪とか気持ちいいから森へいきたいなーと思う

森はふしぎ 雨が降ったら めれている葉っぱがあって落ち葉がすごくてきれい 冬になると葉っぱがうまっていて つめたくて気持ちいい

飽きてきたなーと思うと森のことを考えてみる どんなに楽しいかなーって考えてみる 森ができてくれてよかったって思う はらべこのみんなが遊ぶ森だから

ぼくらの遊ぶところ だから森は大切にしようかなーって思っている 森には何回も行きたい 春になったら水路で遊べる いつも拾った葉っぱをどうしようかなーって思っている お花もたくさんある シカのツノも探せる

自分にとっては森はどうしてできたんだろう どうしてこんなに楽しいんだろうって思う はらべこに入る前は森はどんなかなーって思っていたけど 木のぼりもできるし できない木もある おなかへったとき ホイチゴとかアケビとか食べればおなかいっぱいになる

森とお別れするのはさみしいなーって思う だってはらべこを卒園すると あまり森に行けなくなっちゃうから 森で遊んでいて先生が「帰るよ」っていうとすごくざんねん もっと遊んでいたい 森はすごく楽しいの

これは、林美紀さんが発表してくださった、年中の女の子のことばです。「森ってどんなところ?」お母さんからの問いに答えたそのことばは、まるで宝石のようにキラキラ輝くものでした。

第3部 「森がぼくらの教室だ」



ちょっと視点を変えると、森への入り口はぐんと広がります。第3部では映像と音楽を通して、どこにいても森が教室となるヒントが紹介されました。

伊那市では森林をより良い形で次の世代へつなぐために「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」を掲げて様々な取り組みを行っています。「子どもと森」と題した映像では、信州型自然保育「信州やまほいく」の認定を受ける伊那市立高遠第2・第3保育園と、野外保育園「山の遊び舎 はらぺこ」における、幼少期の森との関わり方とその効果についてインタビュー形式で紹介。会場である伊那西小学校の林間活動の様子や、日々の暮らしの中に森や木を近づけることなど、伊那市が提案する「森への入り口」が、季節が織りなす美しい風景とともに映し出されました。

続いて、伊那市長の白鳥孝さん、映像をプロデュースした伊那市ミドリナ委員会委員長の柘植伊佐夫さん、武田徹さんが登壇し、伊那市の取り組みについて改めて解説しました。「時代を遡っても、私たちの生活と森には切っても切れないつながりがあります。それを再認識して生活していくことが大切なのです」と白鳥市長。伊那市50年の森林（もり）ビジョンサポートプロジェクト「伊那市ミドリナ委員会」の活動や、市内の職人が製作したおもちゃを新生児にプレゼントする「ウッドスタート事業」、地元産のアカマツを使って商品化を目指す「経木」など、地域の宝である森林を生かし、活用する伊那市の取り組みが紹介されました。

映像は下記 URL からご覧いただけます。

「子どもと森」
<https://youtu.be/ClhEvEdC1v0>



「森への入り口」
<https://youtu.be/ZKTmatb7dLg>



そして最後のプログラムは「学校の森ミニコンサート」です。世界を魅了するバリトン歌手・高橋正典さんと、伊那市出身の「魂を揺るがすピアニスト」平澤真希さんが登壇し、平澤さん作曲の「聖なる樹の声」、シュトラウス作曲「Morgen モルゲン」を披露。重厚な歌声と壮麗なピアノの響きに会場が満たされ、参加者は一瞬のうちに「森」をイメージしたその世界観に惹きつけられました。

続けて伊那中学校合唱部の皆さんが合唱曲「ほらね、」を披露。伊那中学校は、会場となった伊那西小学校の生徒が卒業後に通う中学校でもあります。1年生9人、2年生4人、女子生徒ばかりの合計13人のメンバーが、女声合唱ならではの繊細でやわらかな歌声を響かせました。その後、合唱部と高橋さん、平澤さんの合同競演による「いのり」が続きます。

ラストは、伊那市出身の柘植伊佐夫さんが作詞、同じく伊那市出身の天山さんが作曲したオリジナル曲「森のこえ」です。時とともに移ろいゆく森の姿を情景豊かに描き出した歌詞と美しいメロディ。目を閉じて耳をすませば、まるで森の中にいるかのように心が満ち足りていくのがわかります。森とつながることの心地よさを体感できたコンサートでした。





ふりかえり

2019年、長野県伊那市での開催となった「学校の森・子どもサミット」。ラストイヤーとなる今年度は、これまでの「学校活動」からその枠を飛び出し、“子ども”の意味を広げたサミットへと転換させるべく、従来にはない新たなプログラムを設けて開催しました。参加者の皆様からは「森を体感するための新たな視点が開けた」「森を感じ、学ぶことの大切さを一層実感した」「近くに森がなくても、様々な方法で森を感じられることに気がついた」など反響の声をいただき、それぞれに新たな扉を開ききっかけとなったようです。

小さな身体に無限の可能性を秘めている子どもたち。幼少期での森との触れ合いは子どもたちと自然との距離をぐっと近づけ、これからの時代に必要不可欠な「自ら考え、行動できる力」を育みます。そしてその隣には子どもたちを信じ、過分な手助けはせずに見守りながら陰でサポートする熱意を持った先生たちの姿がありました。森であそび、森から学び、森を慈しむ。森林環境教育の大切さ、素晴らしさを改めて感じることでできた子どもサミットでした。